

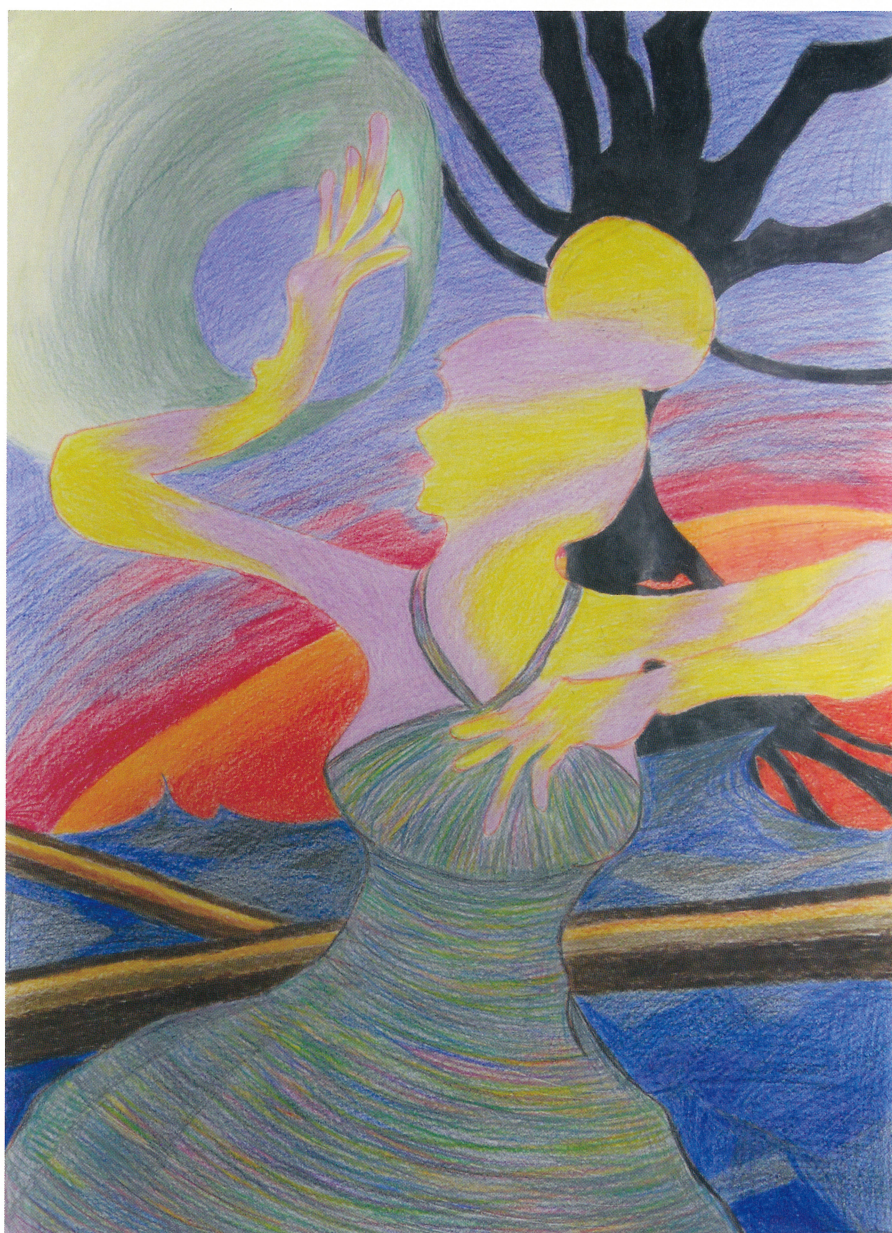
# ポローニア

paulownia

vol. **29**

## 目次

- 2 教育局次長挨拶  
ポローニア巻頭言  
◆石隈利紀  
公開講座  
「東洋医学でリフレッシュ」  
◆濱田 淳
- 3 理療科教員養成施設  
創立110周年記念式典開催を終えて  
◆和田恒彦
- 4 フレーフレー赤組 がんばれがんばれ白組  
◆浅野慎子  
附属中学校の運動会  
◆金子丈夫
- 5 茨城県大子町での  
高校化学部出前授業  
◆濱本悟志  
音楽鑑賞週間  
(1週間毎日放課後コンサート)  
◆高倉弘光
- 6 韓国Hana高校の  
国際シンポジウムに生徒派遣  
◆橘 俊一  
シンガポールへの修学旅行  
◆貴志 泉
- 7 インドネシア・ボゴール農科大学附属  
コルニタ高校との協働研究活動  
◆建元喜寿  
大塚の国際理解教育♪  
アフリカンミュージックコンサート  
◆根岸由香
- 8 「科学の芽」賞授賞式  
◆松本末男



絵:「沈むメアリー・ジョンソン」 添田まりも(附属視覚特別支援学校高等部普通科2年)







TOSHIKUMA  
TOSHINORI

# 筑波大学「40+101周年」に想う

附属学校教育局教育長 石隈利紀

2013年(平成25年)10月1日、筑波大学は「開学40+101周年記念式典」を行いました。筑波大学は1872年9月に師範学校とし開学し、その後東京教育大学として日本の教育界に多大なる影響を与えました。そして101年の伝統を積み重ね、1973年筑波大学としてあらたに誕生しました。この記念の年に一言述べたいと思います。

第一に、筑波大学の伝統の源流は師範学校にあります。永田恭介学長が強調されるように、筑波大学は「師魂理才」(親や先生のように人に接する心や人々をまとめる力をもち、かつ合理的な問題解決の才能をもつこと)を人材マインドとしてきました。この源流が流れる11の附属学校は、現在約4300名の子どもが学んでおり、日本の初等・中等教育ならびに特別支援教育をリードしています。また筑波大学は、学類や専攻を超えて広い領域が組み合わされる「学位プログラム」の提供など、質の高い教育を持続的に発展させております。

第二に、「新構想大学」である筑波大学の開学理念は「開かれた大学」です。2013年筑波大学は、画期的な入試改革案をまとめました。偏差値で競うシステムではなく、「本学の教育を受けるのに必要な基礎学力を有し、探究心旺盛で積極性・主体性に富む多様な人材」を広く受け入れることをアドミッションポリシーとしました。推薦入試の定員を増大し、高大連携による附属の高校推薦も積極的に行われます。また「グローバル入試」により国際バカロレア校修了生やスーパーグローバルハイスクールの卒業生などが入学してきます。

第三に「未来構想大学」をめざす筑波大学のスローガンは、“Imagine the Future”です。筑波大学から地球規模の問題を解決する知が生産され、世界に発信され、世界を変えていきます。また留学する学生の増加、海外留学生の増加により、グローバル人材の育成が進みます。

近い未来(10年後)筑波大学・附属学校は、留学生も日本人学生も、女子も男子も、子どもも若者も社会人も、障害のあるなしにかかわらず、多様な文化を尊重しながら、健やかに、豊かに学ぶキャンパスとして、さらに発展していると願っています。

## 平成25年度公開講座「東洋医学でリフレッシュ!」

理療科教員養成施設 講師 濱田 淳



理療科教員養成施設では、毎年秋に募集定員40名の公開講座

「東洋医学でリフレッシュ!」を実施しています。これは地域の住民等の方々に向けての社会貢献事業で、生活の中で活かす手技療法(あん摩マッサージ指圧)、灸療法の初歩的な技術を講義・実習する内容になっています。

講座全6回のうち、座学は2回、実習は4回で、第1回 概論、第2回 経絡経穴、第3回 灸、第4回 指圧、第5回 マッサージ1(頸肩部)、第6回 あん摩マッサージ2(腰下肢)と異なったテーマで行われました。

本講義には、ご夫婦やご家族の介護をしていらっしゃる方から助産師、看護師等の医療関係者まで様々な方々が参加されます。特に保健相談所で本講座の掲示を見て受講された方は介護、医療関係者が多く、その受講動機としては本講座の知識技術をご自分の職業に活かすことだそうです。

事後アンケートによりますと、講座内容に対するニーズ

も様々です。受講の動機として、東洋医学に興味があったと答えている方が約8割、次いで自分や家族のケアのためと答えている方が3/4程度いらっしゃいます。そして、やはりシリーズ後半の実技講座の評判がよく、講座全体も割と人気があるようで、比較的遅い時刻に開かれているにも関わらず、毎回熱心に聴講され、講座回数を増やしてほしい、より専門的、高度な内容にしてほしいなどのご希望が寄せられています。毎年実施する部屋の収容人数を超える程の応募者数になりますが、近隣施術所との関係があり、現状以上の規模にすることができないのが実情です。そこで配付資料の充実等を通して、受講者のニーズに間接的にはありますが、お応えしていこうと考えています。





# 筑波大学理療科 教員養成施設 創立110周年記念 式典開催を終えて

理療科教員養成施設 准教授 和田恒彦

理療科教員養成施設は、盲学校高等部の専攻科理療科（あん摩マッサージ指圧師、はり師、きゅう師を養成する課程）の教員を養成する我が国唯一の指定養成機関です。本施設は、明治8年（1875）に組織された楽善会を祖とし、明治18年（1885）に文部省直轄学校となった東京盲啞学校（現在の筑波大学附属視覚特別支援学校および筑波大学附属聴覚特別支援学校）に明治36年（1903）に東京盲啞学校教員練習科として設置されました。

理療科教員養成施設は本年創立110周年を迎え、110周年記念事業として、記念誌を発行し、10月19日に記念式典、シンポジウム、祝賀会を開催しました。

記念誌は、歴史編、資料編、年表編から構成されています。掲載資料の再確認は国会図書館のデジタル資料等により行い、記念誌編集の専門家の手を借りて、197ページからなる理療の歴史資料として活用できるものとなりました。本書には、日本点字図書館作成の「テキストDAISY 版」を添付しました。記念誌は記念事業に協賛してくださった方に、配布、送付しました。

10月19日に開かれた創立百十周年記念式典は13時より筑波大学東京キャンパス文京校舎134講義室で行われました。理療科教員養成施設宮本俊和施設長、筑波大学永田恭介学長挨拶の後に、文部科学省高等教育局布村幸彦局長、筑波技術大学村上芳則学長、日本盲人会連合会竹下義樹会長、全国盲学校長会三谷照勝会長、日本理療科教員連盟藤井亮輔会長、創立百十周年記念事業協賛会西條一止会長より来賓祝辞がありました。その

後、理療科教員養成施設永年勤続講師の感謝状贈呈が行われました。

記念シンポジウムは、14時より同講義室で行いました。「理療科教員養成の現状と将来」をテーマに、シンポジストとして筑波大学理療科教員養成施設和田恒彦准教授、福岡県立北九州視覚特別支援学校吉松政春校長、筑波技術大学村上芳則学長、筑波大学理療科教員養成施設宮本俊和施設長、筑波大学大学院人間総合科学研究科障害科学専攻安藤隆男専攻長を迎え、筑波大学理療科教員養成施設前施設長河内清彦特命教授を座長としての活発な討論が行われました。

祝賀会は、17時30分より同文京校舎地下階多目的講義室1において筑波大学永田学長を始め多数の方の出席を受けて行われました。理療科教員養成施設宮本施設長、筑波大学石隈利紀副学長の挨拶の後に、文部科学省初等中等教育局特別支援教育吉田道広調査官、全国盲学校等退職理療科教員親交会島田保男会長、全日本鍼灸学会後藤修司会長の来賓挨拶がありました。その後、筑波大学東照雄副学長より乾杯の挨拶があり、出席者の懇談の後に閉会となりました。

式典、シンポジウム、祝賀会には全国から約200名の理療科教員養成施設のOB、理療科現職教員、関係者が参加し、本施設の歴史的重みと施設の使命を再確認しました。

本施設をご支援いただいた方々に教職員一同、心から感謝いたします。



式典



祝賀会



教育長



# フレイフレイ 赤組 がんばれ がんばれ 白組

～附属視覚特別支援学校幼・小学部の運動会～



浅野慎子

附属視覚特別支援学校幼・小学部 教諭

運動会は、幼稚部・小学部のさまざまな行事の中で最も大きな行事のひとつで、毎年10月10日前後の土曜日に行われます。今年の運動会は10月とは思えない、うだるような暑さの10月12日でした。

幼稚部は、就学前のお子さんと保護者の競技も含め、親子リズムなど3種目、一人一人が楽しみながら活動がわかるように、ゴール地点にはツリーチャイムを置き、そのチャイムを自分で鳴らすことでゴールを確認するなどの工夫をしています。

小学部は赤組、白組2つのチームに分かれて、戦います。今年は、赤組は「みんなで力を合わせて勝利を勝ちとうろ」、白組は「一人一人が力をつくしてがんばろう」というスローガンのもと、力いっぱいの競技が繰り広げられました。「応援合戦」は、6年生の応援団長を中心に、2学期初めから応援歌や手拍子の話し合いや練習を重ねてきました。当日はチームが丸一となり、大きな声をはりあげて熱い応援合戦となりました。それぞれの種目は視覚特別支援学校ならではの配慮や工夫をしています。「直線走」は、赤組はかね、白組は太鼓の音に向かって、まっすぐに力いっぱい走ります。ゴールテープを切った1着の児童にはふわふわのベルベットのリボン、2着の児童にはつるつるしたサテンのリボンを手渡し、手触りで自分の順位がわか

るようにしてあります。また、「紅白リレー」は、ロープの一方の端をグラウンドに固定し、もう一方の端の輪を持って、円を描くように全力で走る円周走です。走者の衝突を避けるため、スタート位置とゴール位置を離し、走者のゴールを告げる笛の音を聞いて、次の走者はスタートします。赤組、白組、それぞれの円の中心から2本のロープを張り、リレー形式で競います。毎年ドラマが生まれるのもこの種目で、赤白二つの円周走を見比べながら、また状況を説明するアナウンスの声を聞いて応援に力が入ります。運動会の最後の競技はつなひき、「わっしょい」の元気なかけ声とともに、綱を肩にかけた子どもたちが入場、左右に分かれ、力をふりしぼって引っ張ります。今年度の運動会は白組が優勝、5年生のキャプテンが優勝カップを受け取りました。

幼小学部の運動会は、子どもたちが力一杯頑張る姿を皆で喜び、確認し合うと共に、ご家族だけでなく、関係する多くの方が来校下さり、繋がりや支えを実感する行事でもあります。



いかだ下り

## 附属中学校の運動会

附属中学校 副校長 金子丈夫

本年の第59回秋季運動会は大雨、そして、大雨・暴風警報に振り回された運動会でした。

9月15、16日の予定だったのですが、大雨でできず延期して、平日の17日(火)の秋晴れの日に実施できました。2日間連続の大雨は滅多にないことでした。

本校の戦後の運動会の歴史を簡単に紹介します。「創立百年史」から引用します。

1947年、疎開先から復帰し廃墟の中から立ち上がり、復興祭として、運動・文化面にわたる企画で実施しようとしたようです。しかし雨天のため運動面は中止。中学高校共催は1954年まで続きました。1955年からは中学生の「秋季陸上大運動会」として、第1回がスタートしました。全生徒が紅白両軍に分かれ、総帥のもと競技をし、握手と拍手で1日が終わるものでした。

固定的でマンネリ化のため、検討が加えられ、新しい企画で再スタートしたのが1975年からの運動会でした。この年からの運動会は、クラス縦割りの5チーム(1組から紅・青・黄・白・緑)対抗戦形式でした。クラス単位でのまとまりや1、2、3年生間の連帯感が高まるなどの改革の主旨が活かされました。この5チーム対抗戦は現在でも変わっておりません。

1979年からは、昼休みに「応援合戦」-1チーム約120名の男女による集団演技-が加わりました。この応援合戦は、現在は「チームパフォーマンス」と名前を変えていますが、今でも実施しています。

本校の特徴的な競技などをいくつか紹介します。「むかで競争」「クラス対抗リレー」などは30年以上実施しています。比較的新しい競技は、「ふえるんリレー」「いかだ下り」「走れありんこ」「ジャンプロープ」などですが、名前だけではわかりませんね。

本校の運動会は、企画・準備・練習・運営に至るまで、生徒が積極的に取り組み、自分たちの運動会だという意識が大変強いです。また、学級や学年が協力して、連帯感を広げ、学校集団の統合と発展を目指して、自治活動の伝統となつて今日でも継承されています。全力を傾注して競技に取り組んだ満足感と、これまでの準備や練習に打ち込んだ充実感が、どの生徒の顔にも見られるのが例年の運動会です。

チームリーダー選手宣誓



チームパフォーマンス



むかで競争







# 茨城県大子町 での高校化学部出前授業

附属駒場高等学校 副校長 濱本 悟志



今年も文化祭の代休を活用し、高校化学部12名が茨城県大子町の小学校で出前授業を行いました。生徒たちは、授業前日の11月6日に現地入り。地元の方々の案内で、袋田の滝、りんご園、久慈川での鮭の遡上と産卵を見学し、大子町の大自然を大いに満喫しました。

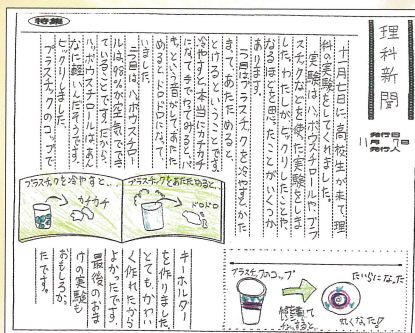
翌日は、いよいよ出前授業。5年目を迎える今年のテーマは「『プラスチック』ってどういう意味?」。午前中は依上(よりがみ)小学校の5・6年生28名と、午後は袋田小学校5・6年生の14名と一緒に、実験を通してプラスチックのふしぎを探っていきました。その実験内容は以下のとおりです。

- ①洗濯のりにエタノールを加え、プラスチックを取り出そう
- ②発泡スチロールをアセトンで溶かし、お湯に入れたら?
- ③ポリスチレンコップをオープンで加熱しキーホルダーに
- ④プロパンガス入り特殊シャボン玉に火を近づけたら?

加熱すると柔らかくなるプラスチックのおもしろさや、特殊シャボン玉の火の玉への変化(ちょっと危険)に、小学生たちは目を輝かせていました。それを見ている高校生たちは大満足。授業ばかりでなく、談笑しながらの給食や昼休みの追いかけっこも、高校生にとってはとても貴重な体験でした。

今回の出前授業には新たなサプライズがありました。引率団団長として同行した星野貴行校長が、袋田小学校3年生の授業に急遽特別参加。微生物の話を知りやすく説明し、その後の素朴で活発な質問にやさしく答えていました。

大子町の豊かな自然と温かい人々に囲まれ、今回の出前授業も無事終了。現在は、二つの小学校から送られてきた感想文や理科新聞を見ながら、楽しかった日を反芻しています。



# 音楽鑑賞週間

附属小学校 教諭 高倉 弘光



附属小学校では、2年に一度「音楽鑑賞週間」というイベントを催しています。ほぼ1週間まるまる子どもたちに良質の音楽を提供するという、ちょっと贅沢な鑑賞会です。毎回テーマを設定して行います。これまで10回行ってきました。「弦楽器の音楽」「民族音楽」「からだ☆音楽」「モーツァルトの音楽」「コラボレーションの音楽」などさまざまなテーマを取り上げてきました。11回目となる今年のテーマは「ジャズ」。一口にジャズと言ってもいろいろなジャンル、演奏形態がありますから、毎日違ったタイプの演奏家においでいただき演奏を聴かせていただきました。

基本的には、毎日放課後の30分程度を使って、100名も入れば満席になる音楽室を会場にコンサートを行います。チケット(無料)を出し、座席を指定します。つまり本物のコンサートでチケットを購入する時と同じ手続きを経験させるのです。「友達と隣の席で…」「残念、もう売り切れ!」という実際のコンサートと同じ感覚を味わうのです。

また、全校児童が一堂に講堂に集まって1時間ほどのコンサートを経験する「全体鑑賞」もあります。今年はジャズピアニストの山下洋輔さんにおいでいただきました。フリージャズの分野で世界的に著名な山下洋輔さんですが、演奏と軽妙な語り口で、子どもたちにもわかりやすくジャズを説明してくださいました。また、子どもたちの質問に真摯に答えてくださったり、子どもたちの様子を見ながら即興的に演奏をしてくださったりと、夢のような充実した時間になりました。

小さな子どもにジャズやクラシックは難しい? いやいや、子どもだからこそ音楽のありのままを豊かに受け入れる感性をもっているものです。おいでいただいた演奏家の皆さんが口を揃えておっしゃいます。「いやあ、子どもたちの反応が素晴らしかった。音楽を本当に感じている…」と。

本物を体感させる…これが附属小学校の音楽鑑賞週間なのです。





# 韓国 Hana高校の国際シンポジウムへの生徒派遣について

附属高校 教諭 橋 俊一



7月21日から25日にかけて、韓国ソウル市北西部に位置するHAS (Hana Academy Seoul) において第4回国際シンポジウムが開催されました。今回のシンポジウムには、シンガポール、中国、タイ、

香港、日本から合計12校が参加しました。本校からは、2年生の石嶋貴君、井上華歩さん、宇佐美皓子さんの3名が参加しました。

今年のメインテーマは Climate Change: Global Risks, Challenges and Our Future でした。シンポジウムは、各セッション毎に、3人一組のチームが3チーム出場し、順にプレゼンテーションを行った後、他のチームやフロアからの質疑応答や意見交換を行う形で進行しました。参加者の英語力は相当高く、真剣でかつ和やかな雰囲気での討論でした。本校の参加は今年が初めてで、手順や要領が分からず戸惑った時もありましたが、質疑応答なども立派にこなしました。また、宇佐美さんは閉会式で舞台の上で初参加の感想を述べる機会を得ました。次に参加生徒3名の感想もお読みください。

**宇佐美皓子 (2年5組)** 今回参加した国際学術シンポジウムでは、他では得られない貴重な経験を積むことができました。準備段階では、いかに理解しやすいプレゼンを作ることの難しさを知りました。現地では、多国籍の友達と打ち解けるには自分から積極的に話しかけることの重要性を学びました。閉会式では参加生徒代表としてスピーチをすることができ、大変貴重な経験をさせていただくことができました。また、スピーチをする

一時間前に生徒代表としてスピーチを知ったので、短時間でもなんとかかまともにできたことは大きな自信になりました。後輩の皆さんも是非積極的に国際交流を行って欲しいです。

**石嶋 貴 (2年2組)** 今回のソウル研修で得たもの、学んだことは非常に多い。HAS (Hana Academy Seoul) にて行われた国際学術シンポジウムでは、異国の人々が一堂に会する際のエネルギーとその可能性の大きさを肌で感じた。彼らはすべて将来の世界をリードするという気概を持っていて、物事に対する真摯さは見習うべきものであった。彼らと共に議論するためには、共通言語としての英語をさらに上達させる必要があると同時に、主張を伝える自信を得ることが絶対条件だと思った。また、ホームステイやHASでの寮生活などを通じて多くの海外の友達を作ることができた。ソウル観光では、景福宮で歴史を学び、市街地で韓国料理や買い物を楽しむなど様々な面からソウルを満喫することができた。この機会を与えて下さった全ての方々に感謝し、学んだことを周囲に伝え、経験を活かしていきたいと思う。

**井上華歩 (2年3組)** 気候変動という世界が直面している議題に高校生が取り組むというのはとても難しいことだ。しかし、様々な学校が違った視点で問題を捉え議論することは、次世代を担う私達にとって貴重な経験だった。また、多くの国の生徒と友達になり、話をする事で自分の視野が広がったと思う。しかし、議論の時も友達との交流の時も、積極性の面で課題が残ったと思う。次回このような機会があれば、自分の意見や考えをもっと積極的に言うことを意識していきたい。とても良い経験だった。

## シンガポールへの修学旅行

附属高校 教諭 貴志 泉

11月22日から26日までの3泊5日、本校123回生は修学旅行としてシンガポールに行ってきました。高校2年生247名と教員、そして石隈副学長にも同行していただきました。

高校生に求めたのはHWA CHONG校 (以下HCIと略記) の高校生との交流と、班別行動による企業や団体に出かけてのインタビューでした。

2006年から始まったHCIとの交流、修学旅行として訪問したのは2007年以来6年ぶりでしたが、HCIの受け入れ態勢は今回も◎(はなまる) でした。もちろん事前に修学旅行委員会とHCI交流担当とのメールのやり取り、そして教員間の話し合いもありましたが、当日のHCI生徒の丁寧な対応は何度来ても感激するものでした。彼らの、痒いところに手が届くような応接はまさに「おもてなし」でした。バスからの移動、講堂の座席案内、活動班別昼食会、校内見学ツアー、12のコース別による交流活動、交流後の移動までの「おもてなし」、そして引率の教員には別に教員用ツアーなどの対応が待っていました。

さて、その交流活動ですが、天然芝のグラウンドでのサッカー、巨大なテント内でのバスケットボール以外に、持ち込み企画のドッジボールや向こうから出てきたチュックボール、アニメ系など12コースに分かれてのものとなりました。HCI生徒の姿が附属高校生にとって刺激になったことは、旅行後の感想などからも読み取れました。

もう一つの課題であるインタビュー。7月に東京校外学習として、修学旅行と同じ班で、テーマを設定して企業や団体にインタビューして回りました。シンガポールの予行演習的な位置づけで、かつシンガポールとの比較対象にしたいとの考えからでしたが、ここでアポイントメントをとることの難しさを学習しました。事前学習不足でのインタビューはうまくいかないことも学びました。夏休み前後からシンガポールの企業や団体へアポイントをとるため、何度も断られながら依頼することが繰り返されました。そこで得た粘り強さは思ってもみなかった収穫かもしれません。

今回の修学旅行は、国際交流と附属高校伝統の班別行動による学習をミックスさせたスタイルで、かなり研修旅行的な面があったと生徒は感じたことでしょう。シンガポール修学旅行で学んだ何か、その学んだものが発芽して実をつけるようになる日を楽しみにしたいと思います。

班別行動で訪れた大聖堂で話を聞く



HCI 午後のティー・レセプション、石隈副学長と話す





# インドネシア・ボゴール農科大学附属 コルニタ高校との協働研究活動

附属坂戸高等学校 教諭  
建元喜寿

インドネシア・ボゴール農科大学附属コルニタ高校との協働研究活動は、2008年に行った文部科学省「国際協力イニシアチブ事業」による「総合学科の知見を生かした農学ESDの実践と深化」にはじまりました。これは、両国で使用可能なエネルギー環境教育教材の開発を行う、教員同士の研究活動でした。2010年2月にはJICAの協力のもと、ネット会議システムによる生徒同士の交流も始まりました。2010年10月から2年間「トヨタ財団アジア隣人プログラム」による「3Rプロジェクト（両校の生徒が、両国のゴミ問題の解決に協働で取り組むプロジェクト）」を実施しました。生徒同士の国際交流から、国際協働学習に発展しました。この活動の期間中の2011年3月に、姉妹校提携も結びました。これを機に、交換留学の希望者が始め、2012年7月から1年間、坂戸高校生が2名、コルニタ高校に留学しました。2013年10月にはコルニタ高校の生徒3名が坂戸高校に1か月間滞在しました。

2012年から、筑波大学が海外連携協定を結んでいるタイ・カセサート大学およびフィリピン大学の附属高等学校も参加した「高校生国際ESDシンポジウム」も開催しています。このシンポジウムでは、各国の代表が、それぞれの国で行われているESD活動について発表を行い、議論を深めています。シンポジウムには、これまで交流のあったタイ・ワタナーウィタヤ高校、台湾の新民高校、そして国際協定を結んでいる、インドネシア林業

省附属高校の生徒も参加しています。

2013年度から生物資源学類生や生命環境科学研究科の院生も参加した、高大院連携による「国際教育実習」「国際インターンシップ」の開発をはじめています。このプログラムでは、コルニタ高校の先生にも協力してもらいながら、学類生や院生が英語による教育指導案を作成。それに基づいた授業を実施しました。2013年12月には、あらたに校外学習（修学旅行）をインドネシアで実施（生徒は、オーストラリア、台湾、インドネシアの3か国から渡航先を選択します）しました。これにより、両校の高校生の協働活動が継続的なものになりました。

これら国際的な活動を経験した生徒は、国際系の学部に進学する生徒、自主的に海外で活動している様子を報告してくれる卒業生もいます。彼らの将来の活躍がとても楽しみです。



## 大塚の国際理解教育♪ アフリカンミュージックコンサート

附属大塚特別支援学校 教諭  
根岸由香

9月18日、大塚特別支援学校では「ライオンキング（劇団四季）」のパーカッション奏者で、アフリカンミュージシャンのB.B.モフランとそのバンド『B.B.モフラン&ジャンボ』を招いて、「アフリカンミュージックコンサート」を行いました。本校の幼児・児童・生徒76名と、小学部がインクルーシブ教育で交流・共同学習を行っている東京学芸大学附属竹早小学校の5年生37名が参加し、みんなで楽しくアフリカンビートで盛り上がりしました。

このコンサートでは、国際理解教育として、本物のアフリカ音楽、生の楽器の音、本場のダンスに触れることや、衣装や楽器、言語の違いから異国の文化を感じ取ることを目的としました。また、音楽やダンスを通して、学校のなかま、他校のなかま、外国の方々と一緒に活動し、交流・共同学習することを経験しました。12月に、JICAのアフリカからの研修員の先生方が来校予定の為、4月から全校集会や音楽の授業を通して、「アフリカンミュージック」に触れ、学習を積み重ねてきましたが、そこでの成果を披露する場ともなりました。

コンサートは、「コミュニケーションは心です。」というモフランさんの挨拶から始まり、軽快なリズムとビート感を全身で感じると、子ども達は自然と立ち上がって踊り出しました。1曲目から、大いに身体を動かし、声を出し、ジャンプをし、曲調に合わせて表現しながら、いろいろな友達と交流しました。子ども

達も、衣装を身につけたり、足に鈴をつけたり、太鼓に触れたりしながら、生の音楽の振動を感じ取り、独特の「間」や「リズム」、軽快な「ビート感」を肌で感じ取りました。2→3→5と拍が変化していくパターンを「ちば」「かまた」「あきはばら」のリズム打ちで行ったり、スワヒリ語の挨拶や簡単な名詞を教わったり、大変楽しく学びの多い内容でもありました。

『B.B.モフラン&ジャンボ』の方々からも、「とても楽しかった。」「みんながいっしょに盛り上がってくれて嬉しかった。」「みんなの反応がすばらしく、1曲目から盛り上がり、こんなことは滅多にないです。」などの感想をいただきました。

今後も、ノンバーバルなコミュニケーション手段である「音楽」や「ダンス」「造形的活動」の良さを活かし、「体験型」の国際理解教育の指導のあり方を探りたいと思います。







## 第8回「科学の芽」賞 表彰式・発表会について

附属学校教育局 教授 松本末男

第8回「科学の芽」賞の受賞者の表彰式・発表会が、昨年12月21日に大学会館ホールで行われた。今回は、小学生部門が8件、中学生部門が9件、高校生部門が3件の受賞となった。どの部門も力作揃いで、審査員の頭を大いに悩ませた。

表彰式では、受賞者一人一人に、永田学長から、表彰状と記念品が授与された。やや緊張した面持ちでいた子どもたちだったが、賞状が授与され、学長から握手されるとにっこりと笑って、賞状を受け取っていた。

各部門の作品について、小学生部門では、鷺見先生(附属小学校)、中学生部門では、真梶先生(附属駒場高等学校) 新井先生(附属中学校)、高校生部門では、鈴木先生(附属高等学校)の各先生から講評を頂いた。小学生部門では、継続して研究している作品や家族の困っている事を解決するための視点からの素晴らしい作品が受賞した。中学生部門では、より科学的な視点で独創的工夫をして研究を積み重ねてきた作品が受賞した。高校生部門では、環境の観点から研究したり、独自に疑問を解決する、すばらしい作品が受賞した。どの作品も未来のノーベル賞を受賞してくれるのではないかと期待を抱かせるものであった。

表彰式の後、一人一人が、自分の作品について、研究の発表を行った。全ての受賞者が、研究のポイントを押さえて、相手に伝える事を工夫して、自分の研究を発表することができた。受賞者は、小学生、中学生、高校生と発表が進むにつれて、高度な作品の内容になったが、相手に伝える力がどの受賞者も素晴らしく、成長を感じさせる発表で、頼もしく思えた。発表の合間に来賓の先生方から、暖かいコメントがあり、発表会終了後は、記念の写真撮影をし、お茶とケーキで、懇談会を行った。懇談会では、濱本副委員長(附属駒場中高等学校)の軽妙な司会の中、受賞者の家族からの喜びや感謝の話しが聞かれた。大いに盛り上がり、和気あいあいと全員が楽しむことができた。

「科学の芽」賞は、年々応募件数が増えており、受賞することが難しくなっている。審査する先生方も、毎年作品の質の向上を実感している。そのような中で、毎年応募する児童生徒や、連続して受賞する児童生徒もいて、継続して探求し、研究する一つのきっかけになっていると感じた。今後も子どもの不思議に思う気持ちや、疑問に思う気持ちを大事にし、いつの日か、研究することの面白さを筑波大学でより深く極める学生が一人でも多く出て欲しい。今回は、過去に受賞した受賞者がお祝いに駆けつけてくれ、児童生徒には大いに刺激になった。

今後も「科学の芽」賞が、子どもたちの不思議なことを探求する大きなきっかけを与えることが出来たら、こんなに嬉しいことはない。



### ●広報誌名「ポローニア」の由来

「ポローニア」とは、「桐」の属名であり、Paulowniaと綴る。本誌を「ポローニア」と名づけたのも、筑波大学の紋章に「五三の桐」が使われていることに拠る。しかし、ポローニアを付与した理由が他にも存在する。近代西洋医学を日本に伝えたシーボルトは、日本において、桐が瑞祥の象徴と見なされ、皇室をはじめ高貴な家柄の紋所として用いられていることを知り、Paulownia(後援者のオランダのパウロウナ公妃に因む)こそが植物の桐のイメージを表現していると考え、桐の学名(Paulownia imperialis)に定め、パウロウナ公妃に献呈した。今後いつまでも、多数の読者に愛され続けることを願い、ポローニアの故事来歴やエピソードに基づき、ポローニアと命名した。

**ポローニア**  
paulownia  
vol. 29

発行日……平成26(2014)年2月28日  
発行者……附属学校教育局教育長 石隈利紀  
発行所……筑波大学附属学校教育局 広報誌  
広報戦略推進委員会

〒112-0012 東京都文京区大塚3-29-1 電話 03-3942-6800  
デザイン……スピーチ・バルーン  
印刷……広研印刷 使用紙: U-limax [日本製紙]

